

伊藤知之さん+早坂潔どんの資料

恋のノーマライゼーション

■それは、オンボロ教会から始まった !!!!! ■

北海道の襟裳岬に近いさびれた浦河の町に、牧師もいないオンボロの教会がありました。ネズミがわがもの顔に走り回るその教会に、精神病棟を退院したけれど行き場のない男たちと浦河赤十字病院の新米ソーシャルワーカー、向谷地生良さん住み着いた、それがことの始まりでした。1978年のことです。

盗聴器が仕掛けられて信じて110番通報する人、妄想がもとで取っ組み合いの喧嘩になってパトカー出動となる人……、教会の評判はガタ落ちです。

病院も「患者と同じ屋根の下で暮らすとは言語道断」と立腹。向谷地さんに「精神科病棟出入り禁止」と「精神科患者との接触禁止」を申し渡しました。

この危機的状況の突破口になったのが、いまは「べてる販売部長」を名乗る“キヨシどん”こと、早坂潔さんです。どんな仕事についても長続きしない彼のために、地元の日高昆布の袋詰め内職が考え出されました。ところが、別のメンバーが親会社の工場長と喧嘩して早々と暗礁に。その時、当時としては妄想に近いアイデアが生まれました。

「漁協から直接昆布を仕入れて、全国に売って町に貢献しよう」。



■妄想・幻覚を商売に■



「精神バラバラ病のキヨシで〜す」という自己紹介から「ばらばら昆布」というヒット商品が生まれました。“キヨシどん”の似顔絵入りです。発作を起こしたときのことを「ばびぷべぼ状態」と呼んだことから、ファックス通信に「ばびぷべぼ」、介護用品ショップには「ばぼ」という名がつけました。

1984年の「妄想」は、現実になりました。10万円の元手で始めた昆布の産地直送販売はいまや、年間売り上げ2000万円に。妄想や幻聴を商品化したグッズや清掃、出版、などの事業を加えた年間売り上げは15年目(1998年)で1億円を達成しました。

91年には第1回「偏見・差別大歓迎大会」が催されました。

ここでは、幻聴を「幻聴さん」と呼び、おおっぴらに披露し合います。これが発展して、「幻覚&妄想大会」が毎年開かれるようになりました。その年にもっとも奇想天外な幻覚・妄想を体験した人にグランプリが出て、みんなから褒められるのです。



■世界初の当事者研究大会■

「世界初」と銘打った「当事者研究大会」も催されるようになりました。研究は医師や研究者がするものという常識を破るものです。「研究」という形をとることで内容が普遍化され社会化され、同じ生きづらさを抱えた仲間にも貢献できる、これはまさに、やむにやまれぬ思いから始まる「当事者ボラ」、そして、「当事者ラボ」です。

これが発展して、『べてるの家の恋愛大研究』という本まで生まれることになりました。

『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』

第1章 「べてるの家のゲンチョーさん」より



1

立ち遅れた日本の精神医療

- 平均在院日数＝欧米の5-10倍
- 精神科病床数＝欧米の10倍以上
- 抗精神病薬投与量＝欧米の5-10倍
- 精神医療と福祉の予算割合
(欧米) 医療＝1：福祉＝9
(日本) 医療＝9：福祉＝1

11.4.18 Ver7.4 当事者研究 向谷地生良 資料提供：平松謙一 2

2



3



4



5



6

■TPPによる医療の市場化について■

薬害エイズ事件当事者であり、生まれてからずっとこの国の医療と国民皆保険制度にあらゆる意味で恩恵を受けてきた患者の一人として、TPPによる医療の市場化を強く心配しています。病院の株式会社経営や患者と医者との間に入る民間保険会社、混合診療の全面解禁など、患者に与える影響について総理のお考えを聞かせてください。

米国は、行き過ぎた市場化により医療サービスの質を低下させ、公的医療保険の範囲を狭め、ますます医療格差を広げています。医療が商品になれば、(日本でも)利益と効率重視により患者の負担が増大し、経済力のない患者や医療費の高い難病患者が切り捨てられかねません。



効率化により医療従事者の労働が更に過重となり、過労死や過労自殺、医療ミスなどの被害が出る可能性もあります。徹底した事前検証なしに拙速に進めれば、日本もあつという間に貧困大国になりかねない。

総理、TPPが医療と介護システムに与える影響への不安の声を受け止めてください。諸外国との交渉テーブルに着く前に、まず総理ご自身の具体的なビジョンを全ての日本国民に向けて語ってください。その将来像の中に当事者である国民も入れてください。

■薬害イレッサ・B型肝炎問題について■

2002年7月、申請から約5か月という異例のスピードで承認された肺がん用抗がん剤イレッサは、承認前に夢の新薬として多くのマスコミが絶賛しましたが、副作用により半年で180人、僅か2年半で557人もの死者を出しました。今月7日、裁判所から国と製薬企業の責任を認める和解勧告が出されたのは、治験の段階で副作用が全て分からなかったからではなく、命にかかわる情報を隠蔽したことによる薬害だからです。

例えば、致死性があるとされた臨床試験結果や肺障害の悪化が確認された実験結果など、企業は様々なデータを改ざんし無視しました。厚生省も延命効果未解明のまま承認した。そして多くの死者を出したことに對し、国と製薬企業は責任がある。この薬害を解決せよと裁判所は求めているのです。

総理、薬害イレッサの和解勧告を拒否することは、薬害肝炎原告の前で政府が立てた薬害根絶の誓いと、薬害エイズ事件の悲劇を繰り返す仕組みを放置することになります。

15年前、薬害エイズ裁判の和解は成立しました。当時、厚生大臣だった菅総理は、原告だった私たちに真っすぐに向き合い、命にかかわる情報の公開に尽力してくれました。弱い者のために躊躇せずに動くことで、20歳だった私に政治が動くことの大きさ、動けば変わるということを見せてくれました。

総理は、自ら「薬害エイズの菅」とおっしゃる。あの薬害エイズ事件を「過去の栄光」ではなく、未来につなげていくことが私たちの務めではないでしょうか。

薬害イレッサも患者への情報提供にあった欠陥が原因です。今も薬害を生み出す仕組みは変わっていないのです。これ以上薬害被害者を生み出さないために、どうか力を貸してください。薬害エイズと同様、薬害イレッサ原告は救済ではなく、責任に基づいた賠償を求めています。総理には判断の前提となる情報が届いているのでしょうか。厚労省は、いまだに薬害を引き起こす構造を引きずっている。全く反省がない。

民主主義の基本である三権分立は、総理にとってどんな存在なのでしょう。薬害イレッサ訴訟、B型肝炎訴訟、大阪泉南アスベスト国賠訴訟で司法が国の責任を認め和解を迫っているにもかかわらず、国の誠実な対応がないのはなぜですか。大阪泉南国賠訴訟では、環境と厚生労働両大臣が控訴断念を決断した後で、内閣がそれを覆し控訴をしています。菅政権にとって国民の命とはそんなに軽いものだったのですか。

■子育て支援について■

あの歴史的な政権交代で、多くの国民が新しい政治が社会を良くしてくれることを望んだ。最も希望を託したのは、何よりもこの国の未来をつくる子供たちのことでした。

私は、子育てをする母親の声を聞く会を続けていますが、聞こえてくる声は多くの地方自治体と同じ、公設保育園の増設などに財政措置を講じてほしいというものです。当事者である親たちや現場の人々、地域の声を無視して子ども・子育て新システムを入れた結果、更に自治体の負担が増えたとき、一体政府はどうするつもりなのでしょう。親が、地域が苦しむ制度の中では、子供が本当に生きていて楽しいと思える社会は実現できません。

一時的なばらまきより、長い将来安心できる子育て支援とは何かを女性たちに聞くこと、国民の命にかかわる医療については患者に正確な情報開示をすること、誰のための成長戦略なのか、その中身を国民に知らせること、国会での与野党の徹底した議論をすること、総理が描くこの国のビジョンと、それを実現されるための徹底した情報公開と、誠意あるリーダーシップをしっかりと見せていただきたい。

私は、おかげさまで、今月35歳になりました。HIVに感染してから25年がたちました。皆様に支えられて、今もこうして発症もせずに生きることができています。これも安心して利用できる医療制度があってこそです。私は、誰もが安心してかけられる医療、そして国民皆保険制度を何としても守りたい。命が最優先される社会の実現を目指して全力を尽くします。

質問を終わります。ありがとうございました。

村木厚子さん夫妻、岩川徹さん夫妻の資料

3つの冤罪事件とメディアの嘆かわしい関係

◆ 検察が空想で「作った」事件



「証拠品改竄・犯人隠避の容疑で、前・特捜部長起訴」
「検事総長が謝罪会見！」

こんなミダシと写真で、前代未聞のニュースが流れたのは、2010年10月21日のことでした。

その4日前、村木厚子さんのパートナーで、きょうこの会場にもいらっしゃる村木太郎さん（厚生労働省総括審議官）からメールが届きました。

「ゆきさんへ／ご心配いただいた方々へ、えにしメールで厚子の手紙の転送をお願いできませんでしょうか。」
「えにしメール」は、ここにお集まりのみなさまご存じのBCCメール。医療と福祉／現場と政策を隔てている深くて広い河に橋をかけ、マスメディアでは軽視されている福祉医療の大事な出来事を、週1回ほど、「志高い」と私が直感した方々に送っているものです。

◆ 「孤独感を感じず1年3カ月余り」 ◆

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）という新しいポストが末尾に記してある厚子さんの手紙を抜き書きしてみます。

9月21日の夜、弘中弁護士から、「大阪地検から、上訴権を放棄するという連絡がありました。おめでとう」という電話がありました。

「検察との闘いが終わったんだ」という思いがこみ上げ涙がこぼれました。

娘がギュッと抱きしめてくれました。

最後まで闘うことができたのは、皆様がずっと応援して下さったおかげです。

拘置所に勾留された人の心理として、「みんな自分から離れていく」という強い孤独感があるのだそうです。

私は、この1年3カ月余りの間、一度もそうした孤独感を感じずに過ごすことができました。

家族も一度も疎外感を味わうことなく過ごすことができました

◆ 自分の出世のために、部下に偽造させた??? ◆

「村木厚子さんご家族に励ましを」と、えにしメールで呼びかけたのは、逮捕されて12日後の2009年6月26日。奇しくも壇上に並んでおられる潔ドンたちが活躍する北海道・浦河の「べてるまつり」会場からの送信、こんな文章でした。

厚生労働省の村木厚子さんが、囚われの身になっています。ご家族と会うことも許されず、「私は、関与していません」と気丈に言い続けておられます。応援している方々の名前を、弁護士さんが接見室の窓越しに伝えることができるだけですが、近いうちに渡せるようになるでしょう。ご家族に励ましの思いを伝えることは、いまでもできます。お立場上匿名希望の方はその旨、お書きになって、小間使い、ゆき、yuki@spa.nifty.com までメールを

匿名希望の方は」と書いたのには、わけがありました。当時の新聞、テレビは、厚子さんを
「政治家の言いなりになって」

「部下に無理に文書偽造させた」

「立身出世主義の悪徳女官僚」

と伝えていました。



左の写真は、無罪が確定して厚生労働省を訪ねた、ふだんの厚子さんの表情です。

ところが、逮捕後の新聞・テレビは、どこから探し出してきたのか、思い切り険しい表情の厚子さんの写真を繰り返し使って、悪女の印象を読者に植えつけていました。

そんな雰囲気社会に満ち満ちていましたから、公的な立場にあるひとは、表立っては応援できない事情があったのです。

私が「えにし」のHPに、「メディアと冤罪の部屋」を増築したり、「えにしメール」で冤罪を訴えたりすると、私の立場を大層、心配してくれる友人知人が大勢いました。

けれど、「女は度胸」が信条(^_-)☆。数えてみたら、1年4カ月の間に20回以上、えにしメールで厚子さんの無実を伝えていました。

◆荒唐無稽・検察の動機不在のストーリー◆

その第1の理由。厚子さんには、動機がまるでありません。検察は、

- ①民主党の石井一代議員が、かつての部下に頼まれて、無理な話を厚子さんに持ちかけた。
- ②厚子さんは、「障害者自立支援法」を成立させるためには、「議員の言うなりになるしかない」と考えた。
- ③そこで、自身の印を部下に偽造させた。

という荒唐無稽な筋書き、「ストーリー」をメディアに流し、ほとんどすべてのメディアがそれを鵜呑みにしているように見えました。

けれど、この筋書きは、3つが3つとも辻褄があいませんでした。

- ①石井議員は当時は野党。その上、障害問題に関心が薄く、この分野にはまったく影響力がない人物でした。厚子さんが気を使う必要は皆無でした。
- ②自立支援法が取引材料にはなるはずもありませんでした。係長が偽造したとき、この法律案は、まだ影も形もなかったからです。それに、
- ③自身の公印の偽造を部下に命じる必要もありえません。

【創刊定価】1ヵ月3,325円(本体3,238円)11部売り(消費税込み) 初刊130円 夕刊50円 (2015年4月発行第13号)

「やり手」女性エース

「やってない」

逮捕前 全面否定

高知大卒
キャリア

障害者支援に力

「ス」

村木容疑者は高知大を卒業して78年4月、旧労働省に採用された。婦人局が長く、女性政策などに携わる優秀な女性キャリア官僚として出世コースを歩んだ。省庁再編で厚生労働省が発足した後、03年8月から2年余り障害保健福祉部企画課長を務めた。

村木容疑者には「物腰は柔らかいが芯は強い」「やり手」などの評価があり、障害者団体との折衝や与野党対策に力を発揮した。

昨年7月には雇用均等・児童家庭局長に就任。厚労相の諮問機関、社会保険審議会、少子化対策特別部会、事務局側のトップとして保商制度改革などについて、厚労省の対応を指揮。また、今国会で成立する竟通しとなった育児・介護休業法改正案などに、衆参の厚労委員会や政府参考人として、委員の質問によつてみなく答弁していた。

一方、6月2日の参院厚労委員会では、事件への関与などについて再三質問されたが、「雇用均等・児童家庭局長の所管ではないので答える立場にない」と繰り返して、事実上高弁を拒否した。

省内では「部下に無理な仕事を押し付けるとは思えない」「政治的な依頼があったとしても、違法なことまでするはずがない」となど、関与を疑問視する声が強かった。

また、福祉関係者は「自分の役職に対し、目いっぱいエネルギーを投入している感じに、時に政治的な動きがある人だった」と言い、今回の逮捕について、国議のある労働組合関係者は「厚労省の女性のエース、『閣内案件』の重圧があったのだらうか」と話した。【佐藤浩】

高知大卒
キャリア

障害者支援に力

「同じく再逮捕された障害者団体『渡の会』（解散）代表、倉沢邦夫容疑者78は「村木容疑者が目の前で日本郵政公社（当時）幹部に電話をし、『証明書を発行する』と口利きしない」と明確に否定した。

「同じく再逮捕された障害者団体『渡の会』（解散）代表、倉沢邦夫容疑者78は「村木容疑者が目の前で日本郵政公社（当時）幹部に電話をし、『証明書を発行する』と口利きしない」と明確に否定した。

して「くれた」と供述したとされる。村木容疑者は「どこが担当かも知らないで、誰に電話をすればいいのかわからない。全くの事実無根」と話していた。

また、当時の部長が厚の会の証明書を発行について「議員案件」として「来た」と申し、衆参の厚労委員会や政府参考人として、委員の質問によつてみなく答弁していた。

一方、6月2日の参院厚労委員会では、事件への関与などについて再三質問されたが、「雇用均等・児童家庭局長の所管ではないので答える立場にない」と繰り返して、事実上高弁を拒否した。

省内では「部下に無理な仕事を押し付けるとは思えない」「政治的な依頼があったとしても、違法なことまでするはずがない」となど、関与を疑問視する声が強かった。

また、福祉関係者は「自分の役職に対し、目いっぱいエネルギーを投入している感じに、時に政治的な動きがある人だった」と言い、今回の逮捕について、国議のある労働組合関係者は「厚労省の女性のエース、『閣内案件』の重圧があったのだらうか」と話した。【佐藤浩】

逮捕前の電話の最後は11日深夜。他の容疑者の供述などで自分への不正の疑いが強まっていることに「私も正直、怖いなって感じがあります。ただ、周りの人はいろいろ言っても、やっていない」と話していた。

とを最も確信を持って
言えるのは（すべてを
知っている）私」と語
り、電話を終えた。

2009.06.15 夕刊

